

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463470

研究課題名(和文)産後うつ病を発症した母親の家族の体験と子育て支援モデルの構築

研究課題名(英文)Husbands' experiences on their partners' postpartum depression in Japan

研究代表者

山本 弘江(Yamamoto, Hiroe)

名古屋大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：80251073

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的1「産後うつ病を発症した母親の体験を明らかにする」産後うつ病を発症した母親のパートナー4名に半構造化面接を行い、質的帰納的分析を行った。2ヶ月のデータ収集を計画していたが、データ目標数から下回ったが、対象者の語りから産後うつ病を発症した母親の家族(夫)は他者へ助けを求めず、困難感を抱え込む傾向にあること、産後うつ病を発症した家族の受け止めと家族調整に関する特徴的なカテゴリーが得られた。研究目的2「産後うつ病を発症した母親の家族の体験とケア・ニーズから、子育て期の家族へのメンタルヘルスに着目した支援モデルを構築する」研究会を立ち上げ、計13回研究会を開催し、多職種連携基盤ができた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to identify husbands' experiences on their partners' postpartum depression (PPD) for supporting family with new born babies in Japan. Semi-structures interviews were conducted with four men whose partners had experienced PPD in Japan, 2012-2014. The interviews explored how they were aware of and perceived their partner's depression. Data were analyzed using qualitative descriptive approach.

The husbands' age were 35-61 years old and their children's age were 1M to 12 years old at this study. They felt that their partner's experience of PPD had significantly affected their life. Their awareness of partners' PPD was consisted of three categories: "difficulty of their partners' emotional control", "feeling of strangeness" and "their partners' verbal expression". Their perception was consisted of four categories: "little minor trouble for my wife", "helpless feeling", "out of ideas" and "hopeless". However, no one aware of physical symptoms of their partners' PPD.

研究分野：生涯発達看護学(家族看護学)

キーワード：産後うつ 家族 子育て メンタルヘルス 多職種連携

## 1. 研究開始当初の背景

現代、多くの母親は、少子化、核家族化から、わが子を育てるまで子どもを知らないまま母親となり、多くの不安を抱えている。地域社会の希薄化からその悩みや相談もできず孤立し、産後うつ病をはじめとする母親のメンタルヘルスの問題が重要視されている。産後1ヶ月のうつ病の有病率は20.4%<sup>1)</sup>という報告もあり、その転機からも産後うつ病の発症率の減少と早期発見は重要な課題である。産後うつ病に関しては、これまで発症リスクや産後うつ病が与える影響、スクリーニング方法、予防や早期発見のための介入について研究がなされてきた。

この中で、夫をふくめた家族は、母親の重要なサポート資源と位置づけられている。しかし、国外の研究では、父親の産後うつ病について注目され、パートナーである妻が産後うつ病を発症した男性の24%から50%が産後うつ病を発症する<sup>2)</sup>ことが明らかとなっている。母親の産後うつ病発症により、夫を含めた家族は、子育てを含め、多くの調整が必要で危機的な状況に陥ると考えられ、子育て期の家族のメンタルヘルスに対する支援が急務である。

## 2. 研究の目的

1) 産後うつ病を発症した母親と家族の体験を明らかにする。

2) 産後うつ病を発症した母親の家族の体験とケア・ニーズから、子育て期の家族へのメンタルヘルスに着目した支援モデルを構築する。

## 3. 研究の方法

1) 産後うつ病を発症した母親のパートナーに対し、半構成化面接法(一部構成化面接法)により質的データを収集し、質的帰納的分析を行う。

2) 子育て期の家族へのメンタルヘルスに関

して、現在の産科施設の産後うつ病家族への支援の現状や課題を明確にし、支援モデル構築を目的として、『子育て家族の心を支える研究会』を立ち上げ、定期的に研究会を開催する(参加者は臨床助産師、研究者等とする)。また、研究会のHPを作成し、支援モデル構築のための多職種連携の検討を行う。

## 4. 研究成果

1) 産後うつ病を発症した母親のパートナー(夫)3名から語りが得られた(現在1名の追加データが得られ、再度分析を行っている)。面接時間は、平均135分で、238コード18カテゴリーが抽出された。

### ストーリーライン

(カテゴリーをアンダーラインで示す)

夫は、感情がコントロールできない状況に気づいて、いつもとちがうという違和感を感じとっていたが、直接的な病気の気づきは妻からの言語的なサインであった。産後うつ病という疾患は知っているが、食事や睡眠など体調に関するうつの症状は気づきにくく、妻が病気だとは思わないが、どうしたらいいかわからないと困惑していた。病気を患っている本人にしか分からない感覚ととらえ、自分は何もできないという無力感を感じている。夫は、受診に期待を持っていない一方で、お医者さんなら...と専門家への期待を示していた。産後うつ病と診断がつき、情報収集を行ったり、妻を見守り、病気と妻を理解しようとしていた。そして妻の負担を減らすために、子どもを妻から離すようにしたり、家事に積極的に参加していた。妻を気遣って妻を優先し、我慢をしており、調整による葛藤を感じていた。妻が産後うつ病を患った時、相談をしたりせず、一人で対処し、周囲に助けを求めない夫の姿が見えてきた。

The age of participants were between 35 and 61 years old. Their children's age were between 1 and 12 years old. The participants felt that their partner's experience of postpartum depression had significantly affected their life. All participants were conscious of disease about postpartum depression. Nevertheless, they were not aware of physical symptoms of their partners' postpartum depression (e.g. insomnia, appetite disturbances). Their awareness of partners' postpartum depression was consisted of three categories. Initially, they were aware of "difficulty of their partners' emotional control" and "feeling of strangeness". Then, they were aware of "their partners' verbal expression". Their perception was consisted of four categories that were categorized as "little minor trouble for my wife", "helpless feeling", "out of ideas" and "hopeless".

産後うつ病を発症した母親の家族の体験として3名の事例検討から、妻へのサポートと子育て、仕事と多くの役割を期待され、葛藤や困難感を抱えているが、一人で対処し、サポートを求めない夫の現状が見えてきた。本研究は事例検討であり、一般化することはできないが、今後さらにデータを集積していくことが必要であると考え。樋貝らが2006年に行った国内の父親の産後うつの実態調査で13%程度の男性が抑うつ状態であったことが明らかになっている<sup>3)</sup>。親のうつ病が子どもの発達等に与える影響の大きさからも、これからの子育て施策は母親だけでなく父親も含めた家族の支援が必要である。さらに研究をすすめる、子育てに関わる夫を含めた家族の体験を明らかにし、専門職者としてどのように子育て支援に関わっていくか検討していきたい。

2) 子育て期の家族へのメンタルヘルスに着

目した支援モデルの構築を目的とし、地域の看護師、助産師、保健師、臨床心理士、研究者によって構成された研究会を平成24年度より立ち上げ、現在までに症例検討会および勉強会を計13回開催した。現在の研究会規模は30から40名である。3ヶ月に1回定期的に開催し、これまでメンタルヘルスに問題を抱える症例についてのケア実践と検討を行ったり、海外の最新の知見の情報共有、地域の産後ケア重点事業の取り組みの実際、EPDSなどスクリーニングの勉強会を行い、支援モデル構築までには至っていないが、子育て期の家族を支援するための地域多職種連携システムづくりの基盤ができたと考える。また、この成果について、研究会ホームページを立ち上げ、情報発信と共有を行うこととした。

#### <引用文献>

1) 山下洋, 吉田敬子: 産後うつ病の母親のスクリーニングと介入について, 精神神経学雑誌, 105(9), 1129-1135, 2003.

2) Janice H. Goodman: Paternal postpartum depression, its relationship to maternal postpartum Depression, and implications for family health, Journal of Advanced Nursing, 45(1), 26-35, 2004

3) 樋貝繁香, 遠藤俊子, 比江島欣慎, 塩江邦彦: 生後1ヵ月の子どもをもつ父親の産後うつと関連要因, 母性衛生, 49(1), 91-97, 2008.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

山本弘江, 妻が産後うつ病を発症した時の夫の体験, 日本周産期メンタルヘルス研究会会誌 1(1), 2014, 40-41, (査読なし)

[学会発表](計 1件)

山本弘江, 妻が産後うつ病を発症した時の夫の体

験 ,第 10 回日本周産期メンタルヘルス研究会学術  
集会 , 2013.11. 9 ~ 10

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

子育て家族のこころを支える研究会  
(平成 24 年 12 月 ~ 計 13 回開催)  
ホームページ作成(平成 27 年 11 月)

<http://kosodate-kazoku.jp/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山本 弘江 (YAMAMOTO,Hiroe)

名古屋大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号 80251073